

## 基幹型共同研究プロジェクト

### 「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」

#### V-V 複合動詞の類型と自他交替

影山太郎

#### 《研究の概要》

日本語の普遍性と個別性を解明するため、レキシコン（語彙と語形成の仕組み）に関わる現代言語学のイシューの中から、ヨーロッパ諸言語と比べて日本語の特徴が現れやすい4つの現象 -- (1)属性叙述、(2)動詞の自他と項交替 [マックスプランク進化人類学研究所との研究協力]、(3)複合動詞、(4)語形成と意味論・統語論との相互作用 -- を取り上げ、形態論・統語論・意味論の理論、外国語との比較、歴史的变化、心理実験など多角的な観点から分析する。研究成果を英文論文集として世界に発信することによって日本語研究の国際的存在感を高めるとともに、言語学的知見に基づく一般向けオンラインデータベースを構築し、研究者だけでなく日本語学習者にも提供する。

共同研究者 33名（日本、アメリカ、イギリス）

#### 《主要な成果物》

(1)属性叙述に関する主な成果物

【論文集】影山太郎(編)『属性叙述の世界』くろしお出版、2012年3月(論文11篇)



(2)動詞の自他と項交替に関する主な成果物

a. 【論文集】Taro Kageyama and Wesley M. Jacobsen (eds.) *Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond* (内部ピアレビュー終了、最終調整中)。Berlin: De Gruyter Mouton, 2014+

b. 【論文集】Bernard Comrie and Andrej Malchukov (eds.) *Valency Classes: A Comparative Handbook*. Berlin: De Gruyter Mouton, 2014+. (Hideki Kishimoto, Taro Kageyama, and Kan Sasaki “Valency Classes in Japanese”を寄稿)

c. 【オンラインデータベース】*Valency Patterns Leipzig (ValPal) Online Database*、マックスプランク

進化人類学研究所、試験公開 2013年11月(本プロジェクトから標準日本語と北海道方言のデータを提供)

(3)複合動詞に関する主な成果物

a. 【論文集】影山太郎(編)『複合動詞研究の最先端一謎の解明に向けて』

ひつじ書房、2013年12月(論文16篇)

b. 【オンラインデータベース】

影山太郎・神崎享子『複合動詞レキシコン』(専門家および日本語学習者向けのオンライン辞書。2,756語の



複合動詞に、形態構造・意味・用例・格パターン/全体検索・前方検索・後方検索などの機能を搭載)。開発版公開 2013年3月。英語・中国語・韓国語翻訳付き完成版 2014年2月。

<http://vvlexicon.ninjal.ac.jp>

(4)語形成と意味・統語に関する主な成果物

a. 【入門書】影山太郎(編)『レキシコンフォーラム No. 6』、ひつじ書房、2013年6月。共同研究者が特集「日本語レキシコン入門」(8篇)を寄稿。

b. 【英文ハンドブック】Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.) *The Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation*, De Gruyter Mouton. 全21章の内部審査・編集作業中。2015年出版予定

#### 《特色ある活動》

日本語研究の国際化と若手研究者育成を目的として、2回のNINJAL国際シンポジウム(若手研究者の公募がスター発表を含む)およびプロジェクト研究発表会(若手研究者の発表を奨励し、優秀な論文は指導の上、論文集に収録)などの活動を行った。

a. NINJAL 国際シンポジウム “Valency Classes and Alternations in Japanese”、2012年8月4日・5日（参加者延べ250名）。招待発表17件、一般公募ポスター発表7件。マックスプランク研究所と共同。

b. NINJAL 国際シンポジウム “Mysteries of Verb-Verb Complexes in Asian Languages”、2013年12月14・15日（参加者延べ240名）。招待発表15件と一般公募ポスター15件。二日目は日本語複合動詞の習得・教育に関する分科会を同時開催。



表2 「動詞連用形+動詞」型複合動詞の分類

語彙的複合動詞 (2つの動詞が直接くっつく)		タイプ3 統語的複合動詞 (V2は、V1を含む補文を取る。文の格関係はV1で決まる。)
タイプ1 主題関係複合動詞 (文の格関係は主にV2で決まる)	タイプ2 アスペクト複合動詞 (文の格関係は主にV1で決まる)	
突き落とす (=突いて落とす /≠落として突く) 絞 <u>り</u> 出 <u>す</u> =絞って出 <u>す</u>	(雨が)降りし きる (≠降って しきる/≠しき りに降る) 流れ <u>出</u> す≠流れ て出 <u>す</u>	出発しかける  主張し <u>だ</u> す(=主張し始める)

### 《何が分かったか、何が出来たか》

種々の活動の中から、複合動詞チームの成果を簡潔に紹介する。複合動詞には名詞+動詞型と動詞連用形+動詞型がある。前者は複統合型(polysynthetic)言語の名詞抱合が典型的な例で、日本語にも「旅立つ」のような例があるものの、あまり生産的でない。他方、動詞+動詞型複合動詞は複統合型言語にはなく、膠着型(agglutinative)言語に見られるが、膠着型言語でも東アジアに特徴的なようである。2013年12月の国際シンポジウムでは、現代日本語、上代日本語、琉球語、アイヌ語、韓国語、中国語、インド諸語、チュルク諸語が論じられ、「洗い流す」のような動詞+動詞型と、「書いておく」のようなテ形接続補助動詞のアジア圏における分布が表1のように明らかになった。

表1 アジア諸語における動詞複合体

	動詞+動詞	動詞テ+動詞
日本語	豊富	ある(アスペクトおよび項交替)
南アジア(インド)	ない	ある(アスペクト)
中央アジア(チュルク諸語)	あまりない	ある(アスペクト)

さらに、東アジアの中でも日本語の動詞+動詞型は韓国語より生産的で多様性に富むことが分かった。

なぜ日本語はこのように複合動詞が豊富なのか、いつの時代からそうなったのか、また、それが方言(特に琉球語)にどう反映され、第一・第二言語習得にどう影響するのか? これらが、解明すべき《複合動詞の謎》である。

謎の解明に向けて、影山(2013、上掲論文集)では従来の語彙的・統語的の区別を表2のように細分化した。

タイプ2は「V1で、V2」で言い換えられず、「書き上げる/書き上がる」のような自他交替に参与するなどの点でも特異である。共同研究者の塚本秀樹(2013)によると、韓国語にはタイプ1はあるが、タイプ2はほとんどない。2013年12月の国際シンポジウムにおいても、タイプ2に該当する複合動詞を持つ言語はひとつも報告されなかった。

さて、共同研究者の青木博史(2013)によると、古代語では2動詞の連続であったものが、中古において複合語としての結合を強めたが、その時代に既にタイプ1、タイプ2、タイプ3が存在した。それが正しければ、「タイプ2はタイプ1(あるいはタイプ3)が歴史的に文法化したものである」といった単純な考え方は成り立たないことになる。上記国際シンポジウムにおいて影山とBjarke Frellesvigは、たとえば「降りしきる(頻く)」が古語では「頻き降る」という逆の語順であったことを各々指摘した。タイプ2の特殊性は、意味と形式のミスマッチ(ねじれ)に起因するのではないかと推測される。

前述の「複合動詞レキシコン」データベースは、共同研究で得られた専門的知見を応用的に社会還元するもので、タイプ1・2の違いをVV(=主題関係複合動詞)、Vs(=アスペクト複合動詞)で分かりやすく表示するとともに、独自に開発した格パターンや意味定義・文例を、ネイティブスピーカーによる信頼性のある英語・中国語・韓国語訳で同時に提示するパラレルデータベースである。

このように、最先端の言語学研究的知見を基にして、研究者コミュニティだけでなく日本語学習者や一般社会にも寄与し得る成果を創出することこそ、大学共同利用機関の醍醐味と言える。